

# 天草版平家物語卷第四第二十章段小考 ——依拠本をみる——

市井外喜子

## 一 はじめに

『日本文学研究』第44号（平成17年2月）に、「天草版平家物語卷第四第八章段小考——依拠本をみる——」を報告した。今回は、卷第四第二十章段（大臣殿を子副将に對面あること：同じく副将を害すること）を資料として、前回と同様な手順にしたがって検討を加え、依拠本を探ることにする。

最初に、卷第四第八章段（大手生田の森の合戦のこと：同じく鶴越を落され、越中の前司が討死のこと）の前半「大手生田の森の合戦のこと」を、古典平家（国会本・京都本・斯道文庫本・小城本・龍大本・高野本・葉子十行本・流布本：8本）の該当部分と対比し、天草版平家の依拠本をみた手順と結果を簡潔に示しておく。

天草版平家と古典平家との対比特徴を、4パターンに整理し、それを吟味した。分類パターンは、次のようになる。

### A 高野本のみが、天草版・国会本と異なる場合

- 1 天草版=国会本∥高野本（当該箇所は存するが、表現形式が異なる場合）

○・○∥△

- 2 天草版=国会本∥高野本（当該箇所が欠如している場合）○・○∥レ

- 3 天草版=国会本∥高野本（当該箇所が高野本のみの場合）レ・レ∥○

### B 天草版のみが、独自性を持つ場合

- 4 天草版∥国会本=高野本（天草版平家が古典平家と対立する場合）○∥レ・

レ

この4パターンにしたがって比較対象とした11文を表にまとめてみると、次のようになる。

卷第四第八章段	天 草 版	国 会 本	京 都 本	斯 道 文 庫 本	小 城 本	龍 大 本	高 野 本	葉 子 十 行 本	流 布 本	備 考  (例文番号)
パターン1	○	○	○	○	○	△	△	△	△	(1)・(2)・(3)
パターン2	○	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ	(4)・(5)・(6)
パターン3	レ	レ	レ	レ	レ	○	○	○	○	(7)・(8)
パターン4	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	(9)・(10)・(11)

この表から天草版平家卷第四第八章段前半部分は、百二十句系統本を依拠本とするとと言える。同時に、天草版平家独自の創意と、あたらしさもみることができ  
る。

## 二 天草版平家・古典平家の対照比較

天草版平家卷第四第二十章段（大臣殿を子副将に対面あること：同じく副将を害すること）を古典平家（国会本・京都本・斯道文庫本・龍大本・高野本・葉子十行本・流布本：7本）と対比して、天草版平家の依拠本を観察し、報告する。なお小城本は巻第11が欠本のため、今回は使用できない。

使用した『平家物語』は、次のものである。

- 1 国会本 新潮日本古典集成『平家物語』新潮社
- 2 京都本 『平家物語百二十句本』思文閣
- 3 斯道文庫本 『百二十句本平家物語』汲古書院
- 4 龍大本 日本古典文学大系『平家物語』岩波書店
- 5 高野本 新日本古典文学大系『平家物語』岩波書店
- 6 葉子十行本 日本古典全書『平家物語』朝日新聞社
- 7 流布本 『平家物語』おうふう

なお天草版平家は、『天草版平家物語対照本文及び総索引』（江口正弘著 明治書院）を使用する。

天草版平家卷第四第二十章段の依拠本をみるに際して、7本の古典平家から代表比較例文を示すのは、国会本（百二十句系統本の代表として）・高野本（覚一系統本の代表として）とする。また、代表的な比較例文から、対比特徴をみると、4パターンに整理することができる。分類パターンは、次のようになる。

A 高野本のみが、天草版・国会本と異なる場合（符号の順序は、天草版・国会本・高野本とする）

- 1 ○・○||△ 当該箇所は存するが、表現形式・位置が異なる場合

- 2 ○・○||レ 当該箇所が欠如している場合  
 3 レ・レ||○ 当該箇所が高野本のみの場合  
 B 天草版のみが、独自性を持つ場合  
 4 ○||レ・レ 天草版平家が古典平家と対立する場合  
 これら4パターンにみられるそれぞれの特徴を以下に記す。

(1) パターン1 (○・○||△)

まず最初に、天草版=国会本||高野本(当該箇所は存するが、表現形式・位置が異なる場合)を、みることにする。例文記述順は、天草版・国会本・高野本とする。

このパターンに属する最初のもは、各々の章段冒頭にみられる。

(1) ・平家亡びてのち、国々も静まって、人の通いもわづらいなければ、義経ほどの人こそなけれ：頼朝わ何ごとをもさせられず：高名あれば、ただ義経の世であらうずると内々申すと聞こえたれば、(天)

・平家滅びてのち、国々もしづまりて、人の通ひもわづらひなし。されば、「九郎判官ほどの人こそなかりけれ。鎌倉源二位殿は、何事もし出だし給はず。高名あるは、ただ判官の世にてあるべし」と内々申すと聞こえしかば、(国：卷第11第109句鏡の沙汰末尾)

・平家ほろびて、いつしか国々しづまり、人のかよふも煩なし。都もおだしかりければ、「たゞ九郎判官ほどの人はなし。鎌倉の源二位は何事をかし出したる。世は一向判官のまゝにてあらばや」など言ふ事を、源二位もれ聞いて、(高：卷第11文之沙汰末尾)

天草版平家卷第四第二十章段の冒頭「平家亡びてのち、国々も静まって、」は、国会本・高野本においてはそれぞれ前章段末尾部分に位置している。天草版平家と同一の冒頭を持つのは、斯道文庫本のみである。卷第四第八章段(大手生田の森の合戦のこと：同じく鶴越を落され、越中の前司が討死のこと)では、百二十句系統本はすべて同一の冒頭であった。天草版と同じものを○、当該箇所はみられるが表現形式・位置が事なるものを△で示し、表として記す。

卷第四第二十章段		天 草 版	国 会 本	京 都 本	斯 道 文 庫 本	龍 大 本	高 野 本	葉 子 十 行 本	流 布 本
(1) 冒 頭	第一段落 平家亡びてのち、国々も静まって、～	○	△	△	○	△	△	△	△
	第二段落 その頃義経大臣殿の父子を具して、～	↓	○	○	↓	○	○	○	○
章段名			○ △ ○	△ ○ ○	○ △ ○	○ △ ○	○ △ ○	○ △ ○	○ △ ○
			○ △ ○	△ ○ ○	○ △ ○	○ △ ○	○ △ ○	○ △ ○	○ △ ○
			卷第11						

- (2) ・右衛門の督立って今宵わここに見苦しいことがあらうぞ：疾う疾う帰ってまた明日 (miōnichi) 参れと仰せらるれども、
- ・右衛門の督立ちて、「今宵はこれに見苦しきことのあらんずるぞ。とくとく帰りて、また明日参るべし」とのたまへども、
  - ・右衛門督これを見て、涙をおさへての給ひけるは、「やゝ副将御前、こよひはとくかへれ。たゞいままらう人のこうずるぞ。あしたは急ぎ参れ」との給へども、
- 大臣殿との対面を終え、副将を無理やりに帰す場面における右衛門督から副将へのことばである。2本の違いは明日である。2系統に属する他の諸本も、同傾向をみせる。(1)に習い、表を示しておく。

	天	国	京	斯	龍	高	葉	流
(2) 右衛門督→副将	○	○	○	○	△	△	△	△

- (3) ・若君わあきれさせられたやうで、二人の女房どもの泣くを見て、大臣殿わいづくにござるぞと、仰せらるれば：武士ども寄ってただ今これにござらうずるに、下りて待たせられいと敷皮の上に抱きをろし奉って、
- ・若君はあきれ給へる様にて、二人の女房どもの泣くを見て、「大臣殿はい

づくにわたらせ給ふぞ」とのたまへば、武士ども寄りて、「ただ今これへいらせ給はんずるに、おりて待ちまゐらせ給へ」とて、敷皮の上にいただきおろしたてまつる。

・この女房ども、あはやあやしき物かなと、きも魂を消して思ける程に、すこしひきさがって、つはもの五六十騎が程、河原へうち出たり。やがて車をやりとゞめて、敷皮しき、「おりさせ給へ」と申ければ、わか公車よりおり給ひぬ。よにあやしげにおぼして、「我をばいづちへ具してゆかむとするぞ」ととひ給へば、

(4) ・河越が郎等太刀を抜いて寄れば、太刀影を御覽ぜられて泣くををどすと思し召したか、いや泣くまいとあって、乳母がふところえ顔さし入れさせられて泣かせられた

・河越が郎等太刀を抜き、寄りければ、太刀かげを見給ひて、「泣くをおどす」とや思はれけん、「いなや、泣かじ」とて、乳母がふところへ顔さし入れて泣かれける。

・重房が郎等、太刀をひきそばめて、左の方より御うしろに立まはり、すでにきりたてまつらんとしけるを、わか公見つけ給ひて、いく程のがるべき事のやうに、急ぎめのとのふところのうちへぞ入給ふ。

(5) ・河越をそしと目を見やわせたれば、太刀でわかなうまじいと言うて、刀を抜き、乳母がふところに顔さし入れさせられた若君を引き離し奉り、ついに首をとった。

・河越、「おそし」と目を見あはせければ、「太刀にてはかなはじ」とて、刀を抜き、乳母がふところに顔さし入れ給へる若君をひきはなちたてまつり、つひに御首取つてげり。

・河越小太郎重房、涙をおさへて、「いまはいかにおぼしめされ候とも、かなはせ給候まじ。とう〜」と申ければ、其時、めのとのふところのうちよりひき出したてまつり、腰の刀にてをしふせて、つゐに頸をぞかいてンげる。

以上の3例は副将が斬られるに至る一連の場面描写である。百二十句系統本・覚一系統本それぞれに委曲を尽している。天草版は、国会本と轍を一にしている。

	天	国	京	斯	龍	高	葉	流	
(3)	○	○	○	○	△	△	△	△	副将被斬
(4)	○	○	○	○	△	△	△	△	
(5)	○	○	○	○	△	△	△	△	

(6) ・二人の女房どもかちはだして義経の前に行いてなにかくるしゅうござらう？若君のを首を賜わって、後世を弔いまらしようと申せば：義経もっともさあら

うずるとて、許されたれば、

・二人の女房ども、かちはだしにて判官の御前に行きて、「なにか苦しう候ふべき。あの若君の御首賜はつて、後世とぶらひたてまつらばや」と申せば、判官、「もつとも、さるべし」とてぞ許されける。

・めのと女房、かちはだしにておつついて、なにかくるしう候べき。御頸ばかりをば給はつて、後世をとぶらひまいらせん」と申せば、判官もよにあはれげに思ひ、涙をはら〜と流いて、「まことにさこそ思ひ給ふらめ。もつともさるべし。とう〜」とてたびにけり。

(7) ・一人の女房わいとけない者の首をふところに入れて沈んだわ若君の乳母であった：乳母が投げたわことわり：介錯の女房さえ身を投げたわありがたいことぢゃ。

・一人の女房は、幼き者の首をふところに入れて沈みたりしは、若君の乳母なりけり。乳母が投げしはことわりなり。介錯の女房さへ身を投げけるこそありがたいけれ。

・一人、おさなき人のくびをふところにいだひて沈みたりけるは、此わか公のめのと女房にてぞありける。いま一人むくろをいだひたりけるは、介錯の女房也。めのとが思ひきるは、せめていかゞせん、介錯の女房さへ、身をなげけるこそありがたいけれ。

(6)・(7)は、副将に対する二人の女房の深い愛情を描いている。古典平家国会本・高野本の異なり、国会本と天草版の連なりが、巻第四第二十章段のおわりにおいてもみられる。表にして、示す。

	天	国	京	斯	龍	高	葉	流
(6)	○	○	○	○	△	△	△	△
(7)	○	○	○	○	△	△	△	△

(2) パターン2 (○・○ || レ)

パターン1に続き、パターン2天草版=国会本 || 高野本 (当該箇所が欠如している場合) をみることにする。

(8) ・二人の女房若君をなかに置き奉って、いかなるを有様にか見なしまいらしゅうぞと言うて、朝な夜な泣くよりほかのことわなかった。

・二人の女房、若君をなかにおきたてまつり、「いかなる御ありさまにか見なしまるらせんずらん」とて、朝な、夕な、泣くよりほかのことぞなき。

・高野本は当該箇所が欠如しているために、直接対比はできない。

(9) ・(若君わ乳母の女房と寝させられた)

・若君は乳母の女房と寝ね給へり、

・高野本は当該箇所が欠如しているために、直接対比はできない。

(9)の後に連なるのは、二人の女房が寝ている副将を起こし、迎えの車に乗せる場面である。高野本はこの場面も欠く。百二十句系統本と覚一系統本の差異が生じるところである。なお(8)・(9)は、挿入句である。

(10) ・(寝ていた副将を起こし、車に乗せる。その車が六条河原へと向かう。) 河原に車をやりとめ、敷皮敷いて若君ををろし奉れば、二人の女房たち日ごろより思いまうけられたことなれども、さし当ってわ悲しゅうて、人の聞くをも憚らず、声も惜しまず、をめきさげられた。

・河原に車をやりとどめ、敷皮しきて若君をおろしたてまつる。二人の女房たち、日ごろより思ひまうけたることなれども、さしあたつては悲しかりけり。人の聞くをもはばかりず、声も惜しまずをめき叫びけり。

・高野本は欠如。

この(10)文の後に、前出の(3)・(4)・(5)の副将の被斬、さらに(6)・(7)が続き、第二十章段が終わる。後半部分のこれらは、百二十句系統本・覚一系統本ともに委曲を尽くし、副将への哀惜に満ちている。これら一連の(3)～(7)の前におかれる(10)文は、効果的な働きをしている。百二十句系統本の特色の一つと言える。表にして、まとめて示す。

	天	国	京	斯	龍	高	葉	流
(8)	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ
(9)	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ
(10)	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ

(11) ・産は平らかしたれども、うちふして悩むと見えたが、我わ今度はかなくならうと覚ゆる：こののちいかなる人の腹に若君をまうけさせらるるとも、

・産はたひらかにしたりしかども、うち臥して悩みしかば、『今度、はかなくなりぬとおぼゆるなり』。いかなる人の腹に若君をまうけ給ふとも、

・産をばたいらかにしたりしかども、やがてうち臥してなやみしが、「いかなる人の腹に、公達をまうけ給ふとも、

	天	国	京	斯	龍	高	葉	流
(11)	○	△	○	○	レ	レ	レ	△

○=㉑+㉒

△=㉒のみ

(12) ・五月七日の卯の刻に義経大臣殿父子を具し奉り、すでに関東えくだらせらるる

・五月七日の卯の刻に、判官、大臣殿父子具したてまつり、すでに関東へぞ下り給ふ。

・高野本は欠如。

(13) ・義経当時暑い中にいとけないもの引き具して、関東まで下るに及ばぬ：ここで良いやうに計らえと仰せらるれば、さてわ失わう人よと心得て

・「当時暑きなかに、幼き者ひき具して関東まで下るにおよばず。これにてよき様にはからへ」とのたまへば、「さては、うしなふべき人よ」と心得て、

・「鎌倉まで具したてまつるに及ばず。なんぢ、ともかうもこれであひはからへ」とぞの給ひける。

(12)・(13)の2例を、表に示す。

	天	国	京	斯	龍	高	葉	流
(12)	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ
(13)	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ

(8)~(13)の6例は、天草版平家が百二十句系統本に依拠しているところが明白である。その中ではパターン1の考察も加味し、斯道文庫本との関係を注目したい。

### (3) パターン3 (レ・レ||○)

パターン3は、パターン1および2とは異なり、高野本のみ当該箇所がみられるものである。同じ古典平家ではあるが、国会本にはみられず、天草版においても欠如しているパターンである。パターン3の例を示す。

(14) ・これを見やれをのをの、これが母わこれを生むとて、難産をして死んだ：

・「これ見給へ、殿ばら。これが母は、これを生むとて難産をして死にぬ。

・「これはおの—聞き給へ、はゝもなき物にてあるぞとよ。この子がはゝは、これをうむとて、

(15) ・大臣殿のすでに関東えを下りある：それがしも義経のを供に下りまらずれば、

・「大臣殿、すでに関東へ御下り候。重房も判官の御供に下り候へば、

・「大臣殿は鎌倉へ御くだり候が、わか公は京に御とゞまりあるべきにて候。

重房もまかり下候あひだ、

	天	国	京	斯	龍	高	葉	流	
(14)	レ	レ	レ	レ	○	○	○	○	大臣殿→守護の武士
(15)	レ	レ	レ	レ	○	○	レ	○	河越→女房

パターン2では、女房(副将)を主体とした挿入句が百二十句系統本にみられ



た。パターン3では、(14)・(15)2例の大臣殿・河越の言葉が注目される。

- (16) ・二人の女房どもよってすすめ抱き奉り、車に乗せ奉った。  
 ・二人の女房ども寄りてすすめ、いだきたてまつり、車にぞ乗せまるらする。  
 ・めのとの女房いだきとって、御車に乗せたてまつり、二人の女房どもも、袖をかほにをしあてて、なくへいとま申つゝ、ともに乗ってぞ出でにける。
- (17) ・高野本(3)末尾部分「我をばいづちへ具してゆかむとするぞ」ととひ給へば、二人の女房共、とかうの返事にも及ばず。
- (18) ・高野本(4)末尾部分 急ぎめのとのふところのうちへぞ入給ふ。+さすが心づようとり出したてまつるにも及ばねば、わか公をかかへたてまつり、人の聞くをもはゞからず、天にあふぎ地に臥して、おめきさけみける、心のうち、おしはかられて哀也。
- (19) ・高野本(5)末尾部分 つるに頸をぞかいてンげる。+たけき物のふどもも、さすが岩木ならねば、みな涙を流しけり。
- (17)・(18)・(19)3例は、天草版・国会本では当該箇所が欠如。  
 (16)・(17)・(18)・(19)の4例を、表にまとめて示す。

	天	国	京	斯	龍	高	葉	流
(16)	レ	レ	レ	レ	○	○	○	△
(17)	レ	レ	レ	レ	○	○	○	○
(18)	レ	レ	レ	レ	○	○	△	△
(19)	レ	レ	レ	レ	○	○	レ	レ

覚一系統本の意を尽くした描写が注目される。また、葉子十行本・流布本の独自性をも注視しておきたい。

(4) パターン4 (○ || レ・レ)

このパターン4は、これまで述べてきたパターン1・2および3とは異なり、天草版平家にのみ見られるものである。天草版の独自性を示すものと言える。表を先に示す。

	天	国	京	斯	龍	高	葉	流
(20) foregaxi	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
(21) iza vofin nafarei	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
(21)' いざ、させ給へ	レ	○	○	○	レ	レ	レ	レ

以下に(20)・(21)・(21)'の例文を示す。

- (20) ・大臣殿のすでに関東えを下りある：foregaxi も義経のを供に下りまらず

れば、

・「大臣殿、すでに関東へ御下り候。重房も判官の御供に下り候へば、

・「大臣殿は鎌倉へ御くだり候が、(中略)重房もまかり下候あひだ、

(21) ・を車寄せて疾う疾うと申せば、女房どもげにもと心得て、寝入らせられた若君ををしをどろかし奉り、*iza vofin nafarei*、を迎いに車が参ったと、申せば、若君をどろかせられて、きのうのやうに大臣殿のを方にまたござるかと思はせられたわいたしいことぢゃ。

(21)' ・(国) 御車寄せて、とくとくと申せば、女房ども「まことぞ」と心得て、寝入り給へる若君をおどろかしたてまつり、「いざ、させ給へ。御迎ひに車の候」と申せば、若君おどろかされて、「昨日の様に大臣殿の御方へ、また参らんずるか」とよろこび給ふぞいとほしき。

(21)' に対応する場面は、高野本には欠如している。

(20)の*foregaxi* についてみると、国会本・高野本ともに「重房」である。巻第四第八章段においても天草版独自性を示す○||レ・レパターンに1例*foregaxi* がみられた。「*foregaxi* とても討死しようずるに、同じゅうわ一所でこそいかにもならぬれ」の*foregaxi* は「守直」である。古典平家の固有名詞が、天草版平家では人称詞(自称詞)が用いられている。

*foregaxi* について天草版平家の出版年(1592)に近い、ロドリゲス『日本大文典』(1604~1608、長崎)の記述をみておく。

・Vare Varera 又は Vareraga Vatacuxi Soregaxi これらは丁寧な形であつて、尊敬し又謙遜して話すのに用いる。普通は男に用ゐられる。初の二つは話しことばと書きことばに、次の二つは話しことばだけに使ふ。

(20) *foregaxi* (重房→女房)、巻第四第八章段の*foregaxi* (弟→兄)は、ロドリゲス『日本大文典』にそくしたものと言える。

(21)・(21)' の例文についてみる。

古典平家とまったく同じ場面において、古典平家の「いざ、させ給へ」が、天草版平家において「*iza vofin nafarei*」と改めたのは、編者不干ハビヤンの工夫によるところであろう。この(21)例文の以前に位置するパターン2 (○・○||レ)の例文(9)の挿入句(若君わ乳母の女房と寝させられた)に呼応するものである。

女房どもげにもと心得て、寝入らせられた若君を *voxivodorocaxi* 奉り、(=お起し申し上げ) *iza vofin nafarei*、(=さあ、お起きあそばせ)を迎いに車が参ったと、申せば、若君 *vodorocalerarete*、(=目を覚まされて)

のように、「*iza vofin nafarei*」の前に、「*voxivodorocaxi* (=眠っている人を強くゆすぶって、目ざめさせる)」があり、後に、若君「*vodorocaxe* (=眠りからふっと目覚め)られて」がくる。「いざ、させ給へ」を、文脈にあわせて

「iza vofin nafarei」と改めたのは、外来宣教師の日本語テキストとしての配慮からと思われる。行動内容を、より具体的に示し、テキストの理解を容易にしたものである。この場面を持たない覚一系統本は、天草版平家との乖離が大きい。

天草版平家に1例みられるこの「vofin」の、当時の言語状態をみるために、古典文献にみられる「おひるなる・おひなる・おひんなる＝お目ざめになる、お起きになる意の女房詞」の出典を追ってみる。

1292頃 中務内侍日記 1309・10 延慶本平家物語（六（第三本）三 新院崩御事付愛紅葉給事 蔵人モ何様ナル逆鱗カ有ムズラムト、胸打騒テ居タル処ニ、御ヒルニ成ケレバ、夜ノヲトバヲ出デモアヘサセ給ワズ、イト、クカシコへ行幸ナリテ、紅葉ヲ観覧アルニ、故ラ跡形ナシ。） 1476・79 兼顕卿記 1477～ お湯殿上日記 1528 宗五大艸紙 1592 天草版平家物語 1603・04 日葡辞書（Vofinまたはvofiru 貴人が眠りから目をさますとか起き上がるとかすること。例、Iza vofin areまたはnafarei<sup>1)</sup> あなたさま、さあお起きあそばせ、など、婦人語 <sup>1)</sup>イザオヒンナサレイ、御迎イニ車ガ参ッタ（Feiqe、P358） 1650 かた言 1692 女中詞・女重宝記 1722 女言葉 他に、志不可起（1727）・物類称呼（1775）・玉勝間（1795～1812）また雑俳・洒落本・人情本等に、「おひなる・おひるなる・おひんなる」が多くみられる。

このように頻出する「おひるなる」は、お目ざめになる・お起きになる意の女房詞として定着していたことが知られる。「いざ、させ給へ」に代えて、「iza vofin nafarei」と改めるのには無理が生じない。

(21)'を表中に示したのは、パターン4（○∥レ・レ）とは異なるが、「いざ、させ給へ」の有無を明示するためである。百二十句系統本と覚一系統本との違いが明白になる。また(21)'例文との比較によって、(21)例文が文脈にそった具体性を、当時のことばをもって改めたものであることも明白になる。

### 三 おわりに（まとめとして）

本稿は天草版平家物語巻第四第二十章段（大臣殿を子副将に対面あること：同じく副将を害すること）に注目し、古典平家（国会本・京都本・斯道文庫本：百二十句系統本、龍大本・高野本・葉子十行本・流布本：覚一系統本）と比較し、依拠本を探ろうとするものである。なお本稿において、具体例として比較文例を示したのは、国会本・高野本である。

対比特徴をみると、4パターンに分類整理できる。

- 1 天草版＝国会本∥高野本（高野本のみが当該箇所は有るものの、表現を異にする）○・○∥△
- 2 天草版＝国会本∥高野本（高野本のみが当該箇所を持たない）○・○∥レ

3 天草版=国会本||高野本(高野本のみ該当箇所がみられる)レ・レ||○

4 天草版||国会本=高野本(天草版と古典平家対立を示す)○||レ・レ

なお国会本のみが、天草版・高野本と異なるパターン(天草版=高野本||国会本)は、みることができなかつた。

この4パターンにしたがって、(1)~(21)'までを表にまとめると、次のようになる。

巻第四第二十	天草版	国会本	京都本	斯道文庫本	龍大本	高野本	葉子十行本	流布本	備考	
パターン1	(1)	○	△	△	○	△	△	△	冒頭	
	(2)	○	○	○	○	△	△	△	右衛門督→副将	
	(3)	○	○	○	○	△	△	△	副将を六条河原に据える	
	(4)	○	○	○	○	△	△	△	女房のふところへ顔を入れる	
	(5)	○	○	○	○	△	△	△	引き離して首をとる	
	(6)	○	○	○	○	△	△	△	女房、首を義経から受けとる	
	(7)	○	○	○	○	△	△	△	女房、桂川に身を投げる	
パターン2	(8)	○	○	○	○	レ	レ	レ	挿入句、女房、副将を思い泣きくらす	
	(9)	○	○	○	○	レ	レ	レ	挿入句、女房、副将と寝ていた	
	(10)	○	○	○	○	レ	レ	レ	女房の悲しむ様子	
	(11)	○	△	○	○	レ	レ	レ	△=われを欠く	
	(12)	○	○	○	○	レ	レ	レ	関東下向日時明記	
	(13)	○	○	○	○	レ	レ	レ	河越の覚悟	
パターン3	(14)	レ	レ	レ	レ	○	○	○	大臣殿→武士	
	(15)	レ	レ	レ	レ	○	○	レ	河越→女房	
	(16)	レ	レ	レ	レ	○	○	△	女房の悲しみ	
	(17)	レ	レ	レ	レ	○	○	○	女房の悲しみ	
	(18)	レ	レ	レ	レ	○	○	△	△	女房の悲しみ
	(19)	レ	レ	レ	レ	○	○	レ	レ	武士の悲しみ
パターン4	(20)	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	foregaxi	
	(21)	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	iza vofin nafarei	
	(21)'	レ	○	○	○	レ	レ	レ	いざ、させ給へ	

巻第四第二十章段は、百二十句系統本を依拠本とすると言える。特に斯道文庫本が注目される。冒頭部を天草版と同じくするのは、斯道文庫本のみである。同時に注目されるのは、天草版平家の創意と、あたらしさである。(20)例のforegaxi、

(2)例の iza vofin nafrei をとりこむ手法に、手堅さをみることができる。

〔補〕

国会本・京都本・斯道文庫本・龍大本・高野本・葉子十行本・流布本の7本の古典平家に、11本の古典平家を加え、「iza vofin nafarei」の有無に注目して、18本の古典平家と天草版平家との繋がりをみる。

11本の『平家物語』は、次のものを使用した。

また当該箇所を表題も記しておく。

- 中院本『平家物語（中院本）の研究』未刊国文資料刊行会：第11おほいどのゝわか君きられ給事
- 城方本『平家物語 附承久記』国民文庫刊行会：第11副将
- 屋代本『屋代本高野本対照平家物語』新典社：第11平家生虜内八歳童副将殿被誅事
- 平松家本『平松家本平家物語』清文堂：卷第11生虜内八歳童福生殿被誅事
- 鎌倉本『鎌倉本平家物語』古典研究会：卷第11生虜内八歳副将殿被誅事
- 竹柏園本『平家物語 竹柏園本』八木書店：卷第11副將軍義宗事
- 南都本『南都本・南都異本平家物語』汲古書院：卷第12目録を欠く。（国会本卷第11第110句副将に相当する。）
- 四部合戦状本『四部合戦状本平家物語』汲古書院：卷11副将
- 延慶本『延慶本平家物語』勉誠社：卷11<sub>30</sub>大臣殿父子関東へ下給事
- 長門本『平家物語長門本』名著刊行会：卷第18大臣殿父子関東下向事
- 源平盛衰記『新定源平盛衰記』新人物往来社：卷第44頼朝義経中悪し附屋島内府の子副将亡ぶる事

『天草版平家物語』卷第四第二十（大臣殿を子副将に対面あること：同じく副将を害すること）にみられる「iza vofin nafarei」を、古典平家18本によって確認する。

注目する箇所を示す。

義経が河越小太郎に副将の処分を命ずる。二人の女房が寝ている副将を起し、迎えの車に乗せようとする。

- （河越→女房）大臣殿のすでに関東えを下りある：それがしも義経のを供に下りまらすれば、緒方がもとえ入れまらしょうずるぢゃ。を車寄せて疾う疾うと申せば、女房どもげにもと心得て、寝入らせられた若君ををしをどろかし奉り、iza vofin nafarei、を迎いに車が参ったと、申せば、若君をどろかせられて、きのうのやうに大臣殿のを方にまたござるかと思はせられたわ

いたわしいことぢゃ。

「iza vofin nafarei」がみられるのは、この1例のみである。該当部分を比較対照した結果を、最初に表にまとめて示すと、次のようになる。

	天草版	国会本	京都本	斯道文庫本	中院本	城方本	屋代本	平松家本	竹柏園本	鎌倉本	龍大野本	高野本	葉子十行本	流布本	南都本	四部合戦状本	延慶本	長門本	源平盛衰記
iza vofin nafarei	○																		
いざ、させ給へ		○	○	○	○	○	○	○	○										

この表から、天草版平家の iza vofin nafarei (さあ、お起きあそばせ) と一致する古典平家が1本もみられないことは、明白である。

国会本・屋代本の2本における該当箇所を示すと、次の通りである。

○国会本 河越の小太郎、女房どもに申しけるは、「大臣殿、すでに関東へ御下り候。重房も判官の御供に下り候へば、若君を緒方の三郎がもとへ入れまゐらすべきにて候。御車寄せて、とくとくと申せば、女房ども「まことぞ」と心得て、寝入り給へる若君をおどろかしたてまつり、「いざ、させ給へ。御迎ひに車の候」と申せば、若君おどろかされて、「昨日の様に大臣殿の御方へ、また参らんずるか」とよろこび給ふぞいとほしき。

○屋代本 河越女房共ニ申ケルハ、「大臣殿既ニ関東へ御下候、重房モ判官ノ共ニ下候へハ、若君ヲハ緒方三郎カ方へ入進スヘキニテ候。御車寄テ候。疾々ト申ケレハ、女房共ケニソト心得テ、ネイリ給タル若君押驚シ奉リ、「イサ、セ給へ。御迎ニ御車ノ参テ候ハ」ト申セハ、若君驚テ、「昨日ノ様ニ大臣殿ノ御方ニ又参ンスルカ」ト悦給ソ糸惜キ。

上記の「国会本・屋代本」と同じように、「いざ、させ給へ」該当箇所を有するのは、表にあるように「京都本・斯道文庫本・中院本・城方本・平松家本・竹柏園本」である。

さて、「iza vofin nafarei」・「いざ、させ給へ」相当部分を持たない古典平家として、「高野本」をまずとりあげる。

○高野本 河越小太郎、二人の女房どもに申けるは、「大臣殿は鎌倉へ御くだり候が、わか公は京に御とゞまりあるべきにて候、重房もまかり下候あひだ、おかたの三郎維義が手へわたしたてまつるべきにて候。とうとうめされ候へ」とて、御車よせたりければ、わか公なに心もなう乗り給ひぬ。「又昨日のやうに、ちゝ御前の御もとへか」とて、よろこばれけるこそはかなけれ。

天草版平家・国会本等と大きく異なるところは、前述の二人の女房が、寝ている副将を起し、迎えの車に乗せる場面を欠いているところである。「(略)とうと

うめされ候へ」とて、御車よせたりければ、わか公なに心もなう乗り給ひぬ。と簡潔な描き方である。この類に属するのは、龍大本・鎌倉本・南都本である。各々異同はみられるが、南都本「トクトク車ニテ渡セ給ヘトテ車ヲ差寄タリケレハ心ナラス乗給フ」が注目される。鎌倉本は「(略) 御車ヲ寄タリケレハ、若君ハ又昨日ノ様ニ父御前ノ御許ヘカト思食テ、何心モナフソ被召ケル」とみられる。

このような本文をみると、天草版平家の依拠本としては、距離を感じざるを得ない。一方、『新定源平盛衰記』第6巻(後注)には次のような注記がみられる。

○伊藤本・八坂本・東寺本・如白本ニ曰ク。寝給ヘル若君ヲ、オシ驚カシ奉リテ、御迎ヘニ人ノ参リテ侍ルニ、イザ行カセ給ヘト申セバ、

これらの諸本は、前述の「寝ている副将を越す」場面を有する点で、百二十句系統本に属するものと言える。

続いて「いざ、させ給へ」・「なに心もなう乗り給ひぬ」相当部分を欠く諸本をみておく。葉子十行本・流布本が属する。葉子十行本の該当部分を示す。

○葉子十行本 重房、宿所に帰つて、二人の女房共に申しけるは「大臣殿は明日鎌倉へ御下り候。重房も御供に罷り下り候ふ間、緒方三郎惟義が手へ渡しまるらせ候ふべし。とうとうめされ候へ」とて、御車寄せたりければ、若君は、「又昨日の様に、父御前の御許へか」とて、斜ならずうれしげにおぼしたるこそいとほしけれ。

このような本文の描き方は、天草版平家の依拠本としては、さらに距離をおくことになる。

さいごに読み本系4本をみると、これまで述べた部分をすべて欠き、4本それぞれの特色をみせている。

○四部合戦状本 (略)「日来の恋しさは物の数ならず」とぞ言ひける。(天草版平家の、大臣殿を子副将に直面すること＝前半で了となり、卷第十二へ進む。副将を害することの後半部分を欠く。)

○延慶本 若君ハ川越小太郎ガ具奉テ、「桂川ニフシヅケニスベシ」トテ、グシ奉ル。(略)

○長門本 若君をば緒方三郎惟能が許に渡し参らせ候べしと申て、大臣殿の御所より車にのせ奉りて、六條河原にやり出し、

○源平盛衰記 (略) 茂房仰せ承りて、駿河次郎といふ中間を相具し、二人の女房に抱かせて六条を東河原までこそ出でにけれ。

4本それぞれの特色をみせ、天草版平家との乖離が大きい。

以上述べてきた諸点を表にまとめてみると、次のようになる。天草版平家との距離をはかる目安となる。

	天 草 版	国 会 本	京 都 本	斯 道 文 庫 本	中 院 本	城 方 本	屋 代 本	平 松 家 本	竹 柏 園 本	鎌 倉 本	龍 大 本	高 野 本	葉 子 十 行 本	流 布 本	南 都 本	四 部 合 戦 状 本	延 慶 本	長 門 本	源 平 盛 衰 記	
A iza vofin nafarei	○																			
B いざ、させ給へ		○	○	○	○	○	○	○	○											
C なに心もなう乗り給ひぬ										(○)	○	○			△					
D B・C部分を欠く													○	○						
E 記述に異なりが多い																	○	○	○	○

注 (○) 位置異同あり △心ナラス

### 参考文献

ロドリゲス『日本大文典』土井忠生訳注 三省堂

『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院

『平家物語』新潮日本古典集成 新潮社

『平家物語百二十句本』思文閣

『百二十句本平家物語』汲古書院

『平家物語』日本古典文学大系 岩波書店

『平家物語』新日本古典文学大系 岩波書店

『平家物語』日本古典全書 朝日新聞社

『平家物語』おうふう

『平家物語（中院本）の研究』未刊国文資料刊行会

『平家物語附承久記』国民文庫刊行会

『屋代本高野本対照平家物語』新典社

『平松家本平家物語』清文堂

『鎌倉本平家物語』古典研究会

『平家物語 竹柏園本』八木書店

『南都本・南都異本平家物語』汲古書店

『四部合戦状本平家物語』汲古書店

『延慶本平家物語』勉誠社

『平家物語長門本』名著刊行会

『新定源平盛衰記』新人物往来社

天草版平家物語卷第四第八章段小考——依拠本をみる——市井外喜子『日本文学研究』第44号 2005年

Iza vofin nafarei 市井外喜子『日本文学研究』第45号 2006年